

本論文は、1990年代以降展開されてきた知覚経験に関する概念主義と非概念主義に関する論争に関して、独自の視点から解決を与えようとしたものである。マクダウェルやブリューワーらが、知覚経験の内容は構造化された概念的なものであるという概念主義を主張したのに対して、非概念主義の立場に立つエヴァンズやクレイン、ケリー、ピーコックらは知覚の内容が非概念的なものであることを主張してきた。本論文は概念主義の立場に立ちながらも、マクダウェルやブリューワーらの「超越論的論証」が不十分であることを指摘し、認知科学や神経科学の成果を取り入れた「自然化された概念主義」を展開することによって、「内容概念主義」の立場に経験的基盤を与えることを試みている。

本論文は三部構成になっている。第一部「概念主義の分析的論証」では、概念主義と非概念主義の対立の論点が整理され、マクダウェルの議論が概念性の基準（合成性、認知的意義、指示決定性、力からの独立）を満たすものであることなどが示される。第一部ではまた、著者の独自の立場を提示することが試みられている。たとえば、マクダウェルの立場は「全体的概念主義」と見なされ、ブリューワーの立場は「部分的全体主義」と見なされるが、筆者は双方の立場に問題があることを指摘し、「階層的概念主義」を導入することを試みる。またマクダウェルとブリューワーの議論は「状態概念主義」を論証するものであっても「内容概念主義」を論証するものとはなっていないという批判があるが、筆者は両者の「超越論的論証」による議論がこの批判に応えるものになっていないことを指摘し、内容概念主義を擁護するためには、自然主義的なアプローチがとられなければならないことを主張する。

第二部「概念主義の経験的基盤」では、ピリシンの視覚的指標理論とマッテンの感覚的分類理論を手掛かりとした「自然化された概念主義」の構築とその擁護が試みられている。ピリシンの視覚的指標理論は、初期過程の感覚システムにおいて、複数の対象に指標が配分され、それらの数的同一性を追跡する選択的注意のメカニズムが働いているという考え方であり、マッテンの感覚的分類理論は、初期過程の感覚システムがすでに概念的な分類を行っているとする考え方である。筆者はこれらの理論が、感覚システムが、命題的に構造化された概念的内容を与えるメカニズムを説明するものであり、「自然化された概念主義」の内実を与えるものであると考える。第二部ではさらに、この「自然化された概念主義」が概念性の四つの基準を満たすものであることや、感覚システムによって形成される概念的内容が「フレーゲ的内容」であることなどが示されていく。

第三部「概念主義と意識および行為」では、意識と行為に関して自然化された概念主義を適応することが試みられる。意識に関しては、プリンツの「中間レベル表象の注意制御理論」(AIR理論)が検討され、「注意と意識」の関係に関する筆者の議論を展開すること

によって、第三章で提示された「階層的概念主義」の精緻化が試みられる。行為に関しては、知覚と行為に関する主要な理論として二重視覚システム仮説と感覚運動アプローチが取り上げられ、二重視覚システム仮説のほうが経験的証拠と整合的であり、自然化された概念主義とも整合的であることが論じられている。

以上が本論文の概要であるが、本論文の主要な成果は以下の四点にまとめることができるだろう。第一に、知覚経験に関する概念主義と非概念主義の論争を丁寧に進めながら、両者の主張を明確化したこと。第二に、概念主義の立場に立つマクダウェルおよびブリューワーの超越論的論証が内容概念主義を論証するには不十分であることを示したこと。第三に、内容概念主義の論証のために、認知科学の成果を利用しながら概念主義を論証する「自然化された概念主義」の立場を打ち出したこと。第四に、全体的概念主義と部分的概念主義の難点を補うものとして、「階層的概念主義」の立場を提示したこと。本論文では、これらの点に関して、哲学および認知科学・神経科学の関連する研究を幅広く参照しながら、高い水準で議論が展開されている。本論文は、知覚経験に関する概念主義の今後の議論にとって、重要な位置を占めるものになるだろう。

本論文での課題としては、概念主義が「自然化」されなければならない理由が十分説得力のある仕方では提示されていないという点などを挙げるができる。著者自身も述べているように、マクダウェルの言う「理由の空間」と「法則の領界」の二分法を「自然化された概念主義」が十分架橋し得るものになっているのかという点については疑念が残る。このことに関連して、第一部と第二部・第三部の関連が必ずしも明確ではないという問題も指摘された。

しかし本論文が、独自の視点から概念主義の主張を統一的に捉え、認知科学・神経科学の成果によっても支持され得るような主張を展開し得ている点は、高く評価されるべきであろう。本論文は、「自然化された概念主義」という立場を提示することによって、今後概念主義の問題を論じる際に参照され、また、著者自身や他の研究者によってさらに展開されることが期待される主張を提示することに成功しているものと評価することができる。個々の議論についても関連する文献を十分踏まえた上で周到な議論が展開され、論文全体として高い水準のものとなっている。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。